

猫の午睡

作——追田琴梨

猫は死んだ。猫とは食肉目の小型哺乳類のことではなく、一人の少女の名だ。猫は車に轢かれ骨を砕かれ血と臓腑を地面に叩きつけ、影だけ見ると元がどんな生き物であるか判別できないくらい奇怪な姿形となり、断末魔を上げる暇もなく大勢の哀れみと恐怖と好奇の入り交じった視線の中、そしてそれに自分で気づかぬまま息絶えた。彼女は同棲していた恋人と別れ、もう二度と会わないつもりで元々最低限しかなかった荷物を手に十二月の寒空に飛び出した。そしてアパートから駅に歩いている途中の交差点で、小型トラックと衝突した。体は数メートル宙を舞ってから後方へと落ちた。車との衝突の瞬間大木が叩き壊されるような轟音がひびき、地面に叩きつけられたときは大きなポロ布が空から降ってきたようだった。

その体は上半身と下半身が腰の部分で横にくの字に捻じ曲がり、裂けた腹からは小腸が露出していた。黒い地面が溶けて沼になったかのように、周囲のアスファルトは血で満たされた。近くにいた人間が反射的に靴が汚れぬよう後ずさる。顔は真上を向いていて、自分でなが起きたのか理解していないよううつろな表情が、車のヘッドライトに照らされていた。そうやって倒れたあとともわずかに息があつて、胸元はゆっくり蠕動していたものの、今更救急車が来たところで助かる見込みがないのはその周囲にいる誰もが理解していた。トラックを運転していた男はその光景を前に、ただ跪いて呆然とするだけだった。パンパの右側がへこんで、ライトが割れて端は赤黒く濡れ、地面にはガラスの破片が散乱している。少女の肉片らしきものも離れたところに落ちていた。こんなに寒いと血が凍っちゃうかもしれないねえ、と事故現場を前にして気が動転していた老婆が呟いた。

不意に後ろの方から、猫の体と車を取り囲んでいた円の中心に女性飛び出してきて、その場にいた人々の視線が一斉にそちらに向いた。

女はそのまま走って、倒れている猫の元へ駆け寄り、血で汚れるのもいとわずに体に覆いかぶさった。周囲の人間は誰もが友人、あるいは家族なのだろうかと判断し、その凄惨な光景に目を背ける。泣き叫ぶ余裕もないかのように、女は猫を抱いて呆然としている。猫の息はまだ辛うじて残っている。しかし、それもじきに終わる。その場にいる誰もが、女もまた理解している。女は家を飛び出した猫を後ろから追いかけてきた恋人だった。名は遠野ケイ。

「ねえケイ。最後に言っておくけど、たぶんきつとわたしは君のことが好きだった」

十二月、真冬の零時過ぎに猫は後ろを振り向かず言った。扉の方に向かつて。半分ほど開け放たれて、外から冷気が差してきている。ケイはさっさと閉める、という言葉を辛うじて飲み込んだ。猫はゆっくり振り向きながら、目に涙を浮かべながら微笑んだ。頬は赤く腫れている。ケイに殴られた後。いつものように。

「今度こそ、本当にさようなら」

そのときになって、ようやくケイは猫の瞳が真剣に、まっすぐこちらを見ていることに気づいた。だから彼女は目を逸らした。これまでの二十二年間の人生でもずっとそうだった。人の目を見られない。あるいは、見たくない。俯いて地面ばかり向いていて、親にケイちゃんは蟻さんがお友達なのねとからかわれることがよくあった。抑圧と鬱屈、ただそれは誰にでも有り触れたものだ。多分この時代、その年齢の少女にとっては。自分で自分の苦しみについて客観視できないほど無知にはなれないケイにとって、その解放もまた